



Title	特集： Bring Your Own Devic
Author(s)	浦西, 友樹
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2020, 20, p. 3-3
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77278
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集 : Bring Your Own Device

浦西 友樹(大阪大学)

Bring Your Own Device (BYOD) とは、構成員が個人保有の機器を持ち込んで利用する概念を指す言葉であり、レストランなどで自前の酒を持ち込める事を指す“Bring Your Own”を由来とする。近年ではノートパソコンのみならず、タブレットやスマートフォンなどでも高度な処理を実行したり、サービスを利用したりできるため、自身で保有する機器を勤務先や学校で活用することで、生産性や利便性を向上させられる。

一方で BYOD 環境を実現するためには、考慮すべき多くの課題が存在している。例えば、デバイスの紛失や盗難に伴う機密情報の漏洩などを防ぐための情報管理、組織のネットワークに接続する際のセキュリティ、利用される OS やハードウェア環境の多様化に伴う互換性の担保、さらには損害発生時の補償などである。

BYOD 環境を大学で実現するためには、いくつかの特有の事情を考慮しなければならない。すなわち、機器を個人保有させる事を前提とするにあたっての学生の経済的事情に配慮することや、学生自身や学生の個人情報を保護することなどである。

今号においては、日本国内の大学における BYOD 環境の「いま」を知るべく、4 つの大学における BYOD 環境を紹介することとした。本学における教育用計算機環境を運営する情報メディア教育研究部門の教員が、BYOD 環境を推し進めている九州工業大学および九州大学を訪問し、実際に運営の様子を見学させていただくと共に、運営しているスタッフの生の声を聞き取った結果を訪問記として解説している。また、大阪教育大学の尾崎拓郎先生、大阪工業大学の越智徹先生のお二方に、それぞれの大学における BYOD 環境をご説明いただいている。

スマートフォンは 2007 年の iPhone、タブレット端末は 2010 年の iPad が起爆剤となり、(ガジェットオタクでは無い) 多くのユーザが利用するものとなった。結果、情報端末は以前と比較してずっとパーソナルなものとなり、文字通り「肌身離さず」持ち歩くものとなった。懸念されるべき点もあることは事実であろうが、個人的には持ち歩く利点の方がずっと多く、もはや情報端末無しでの生活は考えられない。大学においても情報端末を活用しない手はなく、むしろ物心ついた時から情報端末やインターネットサービスに触れているデジタルネイティブ世代が大学生となっている昨今においては、もはや従前の大学のサービスは学生にとって前時代的かつ不便なものであり、今こそ変革の時である事を認識しなければならないだろう。本特集が読者諸氏の BYOD に関する興味を喚起し、議論の種となる事を望んでいる。